「大村の郡三踊（寿古踊・沖田踊・黒丸踊）」重要無形民俗文化財指定答申

特集［大村の伝統芸能］

郡三踊

［こおりさんおどり］

名　称　大村の郡三踊（寿古踊・沖田踊・黒丸踊）

指定種別　国指定重要無形民俗文化財

指定答申

国の文化審議会は、大村市に伝わる「大村の郡三踊（寿古踊・沖田踊・黒丸踊）」を新たに国の指定文化財とすべきとして、答申を行いました。正式な指定は後になりますが、国の文化財としての価値が認められたことになります。

文化財の特徴

大村の郡三踊は、市内の寿古町、沖田町、黒丸町のそれぞれに伝わる寿古踊、沖田踊、黒丸踊の総称です。それぞれ別々の踊りですが、同じ始まりの伝承を持ち、近い地域に伝わった踊りとして、今回一緒に文化財に指定されることとなりました。

3つの踊りとも、約500年前の戦国時代に始まったとされ、それぞれの踊りの中に、ゆっくりとした曲のテンポや所作など中世の踊りの特徴を良く残しています。中世から伝わる踊りは県内でも珍しく、また、江戸時代の文献に記された踊りの構成や曲目などを、現在でもあまり変わらず伝えられているなど、非常に貴重な踊りです。長崎県地方の民俗芸能の特色や古くからの伝承過程を良く示しており、その価値が認められました。国指定の無形民俗文化財としては、長崎県では6件目、大村市では初めてとなります。

起源伝承

約500年前の戦国時代、大村の領主大村純伊は、有馬家との戦に敗れ領地を失います。数年後、領地を取り戻しますが、その祝いの場で踊られたのが、この3つの踊りで、出された料理が大村寿司とされています。寿古踊は、佐賀の須古の者が教え、沖田踊、黒丸踊は、浪人法養が教えたとされています。

江戸時代には、お城で奉納されていましたが、この時には寿古踊が最初に踊る習わしになっていました。江戸時代後期に倹約のため、他の多くの踊りが中止になる中、この3つの踊りは、藩主大村家に関わる踊りとして、特別に踊ることが許されていました。

▶黒丸踊法養堂の法養の碑

寿古踊

［すこおどり］

［舞太鼓］

太鼓を打ち鳴らし優雅に舞う〝殿様踊〟

舞太鼓を中心に、周囲を垣踊りが囲んで踊られる優雅な踊りです。中心の舞太鼓は殿様を表し、別名「殿様踊り」と呼ばれます。この舞太鼓は、月の輪のついた笠を被っており、佐賀・長崎地方に多い浮立踊りの系統を良く引いています。

［垣踊り］

家臣を表す「垣踊り」は地域の子どもたちで構成され、付き添いとともに入場し、殿様を守りながら踊ります。

会長の愛合さん宅には、寿古踊のために大村家から贈られた約100年前の着物が大切に保管されています。

踊りを披露するときは、町内総出。3年に1度、「花菖蒲まつり」と「おおむら秋まつり」で披露されます。

寿古踊保存会

会長
愛合（あいごう） 久幸（ひさゆき）さん

町内一体となって保存活動に尽力されてきた寿古踊保存会の皆さん。会長の愛合さん自身も、踊りの師匠として後継の指導にあたっています。「先祖代々、伝統を大切に受け継いできたことが評価されたのだと思う。喜びと同時に責任も感じているが、地域の協力を得ながら継承していきたい。」と愛合さん。

沖田踊［おきたおどり］

［小太刀］

なぎなたと刀が融合する珍しい踊り

長刀と小太刀が向かい合って、切り合う様子を表した踊りで、別名「なぎなた踊り」と呼ばれます。棒踊の一種ですが、長刀と小太刀で行う踊りは珍しく、また、踊りのテンポもゆっくりで、中世の踊りの形を良く残しています。

［長刀］

縁起の良い鶴と亀、松をあしらった傘鉾。地域の協力で、沖田町公民館の屋根裏には専用の格納庫があります。

中学生の「長刀」と、小学生の「小太刀」がしなやかに演舞。お互いに向き合って刀を打ち合わせて踊ります。

昭和50年に復活した沖田踊。三踊の輪番で「花菖蒲まつり」「おおむら秋まつり」で披露されます。

沖田踊保存会

会長
柴田（しばた） 忠孝（ただたか）さん

住宅が増え、人口は昔の約5倍になった沖田町。それでも踊り手の人集めには苦労しているそうです。「沖田の名が付くものが国指定となることに誇りを感じる。これからは後継者育成が不可欠。地域の皆さんと協力体制を整え、永遠に沖田踊の伝統が続くよう、継承に努めていきたい。」と会長の柴田さん。

黒丸踊

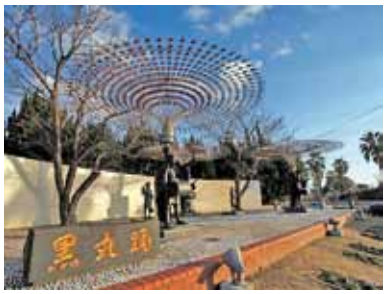
［くろまるおどり］

［手踊り］

大花輪が揺れる 勇壮で華やかな舞い

直径約5メートル、重さ約60キロを超す4つの大花輪と、2つの大旗が太鼓を叩きながらゆっくりと踊る勇壮な踊り。中央には、子どもたちの手踊りが加わり、踊りを構成します。大きな飾りを背負った踊りは全国にもいくつか見られますが、長崎・佐賀地方では非常に珍しく、また、踊りのテンポや所作などからも、他の2つの踊りと同様、500年前の戦国時代の踊りの形を良く残しています。

祭りやイベントなどで年に数回奉納される黒丸踊。大花輪の下に入ると幸福が訪れるとの言い伝えがあります。



長崎空港入口にある「黒丸おどり像」。夜間はライトアップされ、空の玄関口大村を強く印象づけています。

大花輪はすべて手作りで、4年に1度新調。老人会など地域の皆さんがボランティアで制作しています。

黒丸踊保存会

会長
陳内（じんない） 忠（ただし）さん

早くから文化財指定に力を注いできた黒丸踊保存会。市内のみならず、県外、海外でも公演してきました。「歴代先輩の願いが叶い感無量。関係者の皆さんに感謝している。指定をきっかけに、この地域の宝が永遠に続き、さらには発展できるよう継承していく。それが私たちの使命。」と会長の陳内さん。